

地理学視点の福岡：都市圏成長の背景：福岡地理学会設立75周年記念出版

阿部, 康久
九州大学大学院比較社会文化研究院：准教授

磯, 望
西南学院大学：名誉教授

芳賀, 博文
九州産業大学経済学部：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7388878>

出版情報：pp. -235, 2024-11-20. 有限会社 花書院
バージョン：
権利関係：



コラム 1

北九州市と福岡市

石 黒 正 紀

はじめに

福岡県は、2020（令和 2）年に人口 513.5 万人を有する西南日本における最重要県であるが、その中心となるのは県の北東端に位置する北九州市と北西岸に接する福岡市の 2 大都市である。2 市は共に政令指定都市という我が国の主要都市であり、我が国及び福岡県の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし、その成立の経緯や特徴、盛衰には大きな差異があり、本稿ではその辺の状況を少し検討してみることにする。

1. 北九州市

北九州市は、1963（昭和 38）年 2 月に世界的にも珍しい門司市（15.6 万人）、小倉市（31.3 万人）、若松市（10.5 万人）、八幡市（34.9 万人）、戸畑市（10.8 万人）の 5 市が対等合併して成立した全国 7 番目（含む東京 23 区）の 100 万都市（103.2 万人）で、5 市が 5 区として全国 6 番目の政令指定都市になった。その後 74 年に小倉区が小倉北区と小倉南区に、八幡区が八幡東区と八幡西区に分区されて現在の 7 区体制になった。60 年代は高度経済成長の最盛期で、市周辺は筑豊炭田を背景に鉄鋼業を中心とする我が国最大の素材供給基地として発展しており、4 大工業地帯の一つに位置付けられていた。工業化が都市発展を推進する事例として広く注目されており、その一層の発展が期待されていたが、実際には工業化による大気汚染や洞海湾の水質汚濁といった激しい公害が進行していて、その対策に係る経費の確保が各市単独ではなかなか困難になり、合併による財政規模の拡大と投入が不可避だったのが現実であった。

市当局や地元企業、市民の努力もあって公害はその後改善されていくことになるが、我が国の経済のサービス化などによる産業構造の変化とそれに伴

う北九州工業地帯の相対的地位の低下により、市の成長には陰りがみられて人口も79年の106.8万人をピークに減少に転じ、2005（平成17）年には100万人を割り込むことになった。その後、市当局は市勢回復のために環境産業や情報産業などの誘致に取り組むなど様々な対策を重ねてきたが、若年労働力を中心に人口流出が続き、高齢者比率が30.6%（2020年）と政令指定都市の中では最高になり、人口も93.9万人（2020年）まで減少してしまった。

2. 福岡市

福岡市は、古くから港町で商人町だった博多と黒田氏の城下町だった福岡を母体として1889（明治22）年の市町村制の施行によって我が国で最初に成立した市の一つである。その成立時には市名の決定が問題になって最終的に福岡市になったが、JR（旧国鉄）の中央駅名は博多になっている。その後は県庁所在都市として戦前戦後を通して発展していくことになるが、北九州市が成立した当時の人口はまだ70万人程度であり、県内で2番目の政令指定都市になるのは1972（昭和47）年のことで、中央区、博多区、東区、西区、南区の5区で構成され、その後82年に西区が西区、早良区、城南区に3分割されて7区体制となった。

75年に山陽新幹線が博多まで延長されて九州の交通拠点としての機能が強化され、人的交流も盛んになって人口も100万人に達した。市は新たな成長の段階に到達して79年には北九州市を抜いて九州最大都市となった。市は北九州市とは異なって製造業の集積は乏しいが、広域中心都市と呼ばれる九州ブロックの中心として卸売業や金融業などの第3次産業の集積が進行するとともに、中枢管理機能といわれる都市の中心的機能が都心部に立地し、その後も発展を続けていくことになる。

交通に関して言えば、福岡空港は都心からのアクセスの良い空港として知られており、東アジアの国々や地域への航空路が、65（昭和40）年のプサンとの航空路の開設以降、順次19路線に拡大される一方、91（平成2）年に博多港からプサン港との国際航路の開設もあって国際都市としても発展を遂げていくことになる。さらに2011（平成23）年の九州新幹線の全線開通による九州各地からの旅客の流入増加によって、駅前に新たな商業やオフィスの施設が立地して新しい商業中心が形成される一方、従来の中心地で若干の陰りがみられていた天神地区は、天神ビックバンと呼ばれる大規模な都市

再開発が進行して九州地方最大の中心地の復活が進行している。その結果、人的交流が活発化して多くの女性を含む若年人口の流入が進行し、15～29歳人口の比率は17.6%（2020年）と政令指定都市で最も高くなっており、人口は161.2万人（2020年）に達して全国で第6位になっている。

むすび

以上、簡単に両市の経緯について概観してきたが、都市成長の基盤になるものは北九州市の成長を支えた製造業ではなく、福岡市の成長を支えた政治と経済であることは明らかである。都市は地域の中心として人流と物流が盛んになることが必要であり、交通網の発展もその機能を支えるものとして重要である。九州ブロックの広域中心都市として機能している福岡市は、今後も成長していくことが想定されるが、北九州市の復活は簡単ではないと思われる。

参考文献

富田和暁・藤井 正編（2010）：『図説 大都市圏（新版）』古今書院。

野澤秀樹・堂前亮平・手塚 章編（2012）：『日本の地誌 10 九州・沖縄』朝倉書店。

平岡昭利編（2008）：『地図で読み解く日本の地域変貌』海青社。